‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

64号 1993.3.31
文・編集・発行
恋怪子

SONG:"ROCK 'N' ROLL LOVERS"

新宿の路上を漂流している男がいる。速足で歩いているのを遠くに見かけることもあるし、路上ですれちがうこともある。そのたびに私の心臓はドッキン・ドッキンと信号を鳴らす。私にはその男の両眼に湛えられているものを言いあらわす言葉を見つけることができない。両手に棒を持って、タイコをたたくようにゴミの箱をたたいているのを見たこともあるから、私は密かにその男をブルース・マンと称んでいる。その男は明治通りのガソリン・スタンド横の歩道橋下を長いこと棲処にしていたが、道路工事が始まってそこにはいなくなった。だいぶたってから通りの反対側、花園神社近くにある歩道橋の下を棲処にしているのを見つけた。が、洒落たレストランのすぐ目の前だったせいか、すぐにそこにはいなくなった。ふとんや段ボールや新聞紙や空き缶がなくなり、すっかりきれいになったその場所はいまは自転車置場になっている。その男は、そうやって棲処をかえながら新宿の路上を漂流している。

LAST DANCEが去年の12月で活動を休止したから、私はいじの棲処をなくし漂流している。だからといって、私は自分があの深い眼をしたブルース・マンと同じだなんて言いたいんじゃない。

地下=アンダーグラウンドを漂流していた間章(あいだ・あきら)という男がいる。「僕はランチに出かける。それは闘いながら死んでいった者たちとまだ闘いつづけている者たちとの会食だ。……このランチには遅れるわけにはいかないのだ」と言って、1978年に32才で逝った。ロックエッセイ「僕はランチにでかける」があとに遺った。ニューヨークのカフェで麻薬の売人ジョーがそう呼んだように、私もここではアキラと称ぶことにする。

アキラは「女は七びをかかえることなんてできないんだ」って言う。いじの棲処をなくした私にこの言葉ははねて刺さるとびだしナイフ。そう、女は七びをかかえることはできない。産む性だからね。産まされる性だからね。女ができるのは、だから七びを男から男へとつなげていくことなんだ。アキラの言うとおり「肉体を呪うか、快楽をむさぼりつくすしかない」から女は正気ではいられない。ランボーにも、アルトーにもなれやしない。アキラに「(女は)本当のソロ・ダンサーにはなれっこない」って言われたら、もう口を噤むしかない。だって私はアキラが本当のソロ・ダンサーだったってことを感知しているからね。「僕はランチにでかける」を読むと、アキラが七びをかかえ、正気で、アンダーグラウンドをひとりで深く漂流しつづけた本当のソロ・ダンサーだったってことが感知できるからね。

私は自分が七びをかかえているとか、ソロ・ダンサーだとかって言いたいわけじゃない。ただ、アキラもあのブルース・マンも私がLAST DANCEといういじの棲処をなくしたんだってことを、その存在のありさまで何度も何度も私に思い知らせるのだ。

去年の12月13日、ライブの前にLAST DANCEがこの日とあと1回のライブで活動を休止することを知らされて、私は開場時間までアンティックの階段に座りこんでつぎつぎと背中にすがりついてくる感傷をふりはらっていた。あと2回しかないLAST DANCEのライブなのに感傷なんかに邪魔をされたくはない。

この日のライブは「ロックンロールラヴァーズ」("ROCK'N'ROLL LOVERS")ではじまった。ヴォーカルの人のかきならすギターの音がいじ臓を射ちぬいた。そして、「どうせひとつの恋なら…」と歌がきこえてきた。とたんにふりはらったはずのいくつもの感傷がいちどに襲ってきて、私はその場にへたりこみそうになった。けれどもそうはならなかった。「ロックンロール・ラヴァーズ」が感傷を跡かたもなく吹きとばした。そしていじがむき出しになった。

どうせひとつの恋なら

いますぐ俺につかまりゃ　ぬけられる
こんな恋のためならば
殺したってやってやる
そしたら俺天国へゆけるかい

お前はいつもつぶやいていた
おいらにすべて賭けてみるって　承知だぜ
気ちがうほどに狂った夜を
一人占めしたお前はバカさ　あぶないぜ

誰にも邪魔はさせない
半宙がすこし欠けても　ここでつながってるのさ
- (ききとれず)
ことばなんかじゃ伝えたくない
ことばなんかじゃ伝えられない
わかるだろ　HEY YOU

ヘマもするほど余裕がなけりゃ
ゲームを降りる勇気がなけりゃ　つかまりな

どうせひとつの恋なら
せずんだっていいじゃない
いますぐ俺につかまりゃ　ぬけられる
どうせひとつの恋なら
つかんだっていいじゃない
いますぐ俺につかまりゃ　ぬけられる

こんな恋のためなら
殺したってやってやる
そしたら俺天国へゆけるかい
OH MY GOD
WE'RE ROCK'N'ROLL LOVERS

——— ROCK'N'ROLL LOVERS(1992.12.13)

「ロックンロール・ラヴァーズ」はむき出しになったいじを容赦なく攻めたて、生きたいじせがしなかった。体が凍りついて身動きができなかった。こわかった。

去年の2月16日にアンティックではじめてライブを見てから10ヵ月のあいだLAST DANCEは、ずうっと私のいじの棲処だった。10ヵ月といえば、女が子どもを一人産めるくらい長い。私はこの10ヵ月のあいだ、一人の男につくすのと同じように百人の男につくした。百人の男につくすのと同じように一人の男につくした。子どもを百人も産んだ。正気でいられたLAST DANCEといういじの棲処で、シオランの言う「不死の感覚」で「時間を超えた日々」を過していた。

アキラは「なげやりになること、行きあたりばったりになること、それが女のやさしさの本質だものね。つまりは受けいれること。この世界をね」って言う。それができない私は、この世界では全部やりそこなっている。だからきっとアキラの識っていた「異なる世界のひび割れるまさに遍在する境目」と私の識っているそれとはちがうのだろうし、アキラの識っていた「魂の脱け落ちた音楽」「めくらの音楽」と、私の識っているそれとはちがうのだろう。

去年の12月13日、私は「ロックンロール・ラヴァーズ」でLAST DANCEでの最後の踊りを踊った。

私は、女もやっぱりソロ・ダンスしか踊れないんだって思うから、アキラもLAST DANCEも私の踊りの相手とは言わないよ。

アキラは私のロックンロール・ラヴァー。
LAST DANCEは私のロックンロール・ラヴァー。
そう、WE'RE ROCK'N'ROLL LOVERS.

とってもwayoutだったよ。あの頃のヴェルヴェットは決してフェノメノンじゃあなかった。まさにリアリティ(現実)そのものだよ。でも彼はただのシンボルになってしまった。今のルー・リードは昔のルー・リード自身を追っかけているみたいだし、ヴェルヴェットの頃のルー・リードの夢のかけらを食って生きてるみたいに思えてしようがないだけさ。ルー・リードはルー・リードになろうとしている。僕たちはそう思うね。昔は彼は彼自身以上の存在だったんだから」「パティ・スミスなんてどう思う?」「あれは女さ。そう、決して悪い女じゃない、いい女さ。でもそれ以上でも以下でもない。失楽園で恋する女というだけだ。僕は好きだよ。寝たいと思うもの。だけど彼女はランボーでもアルトーでも昔のディランやルー・リードでもないよ。何もかもが終ったあとで、その終ったことについてしゃべっている空ろさがある。女にできることでは最高かもしれないけど」「女はやさしく股をひろげるしかないもの、ジョー、それはしようがないよ。女は七びをかかえることなんてできないんだ。肉体を呪うか、快楽をむさぼりつくすしかないんだ。本当のソロ・ダンサーにはなれっこないよ。まつわりつく視線をはねることなんてできないんだ。なげやりになること、行きあたりばったりになること、それが女のやさしさの本質だものね。つまりは受け入れること。この世界をね。一人の男につくすのも、百人の男につくすのも同じことなんだよ。ミイラにもロボットにもなれっこないんだ。私だって彼女の詩や歌は好きだよ。なりそこなった少女というのはいつもノスタルジックなものだからね」

るか、マリオネットのように操られ、おどりつづけねばならない。空ろな歌を歌いつづけるマリオネットのロック・パフォーマーやロック・シンガーは、歌うしか能のないカナリア同様、時代の手か破壊者の手によって殺されねばならない。〈アマルガム〉は無限に多様で異なる世界を提示してゆくだろう。われわれはオンリー・ザ・ワン・アースにいるのではなく、異なる世界のひび割れるまさに遍在する境い目に、常にひとつずつの〈カオス〉を抱えて存在するのである。

に。魂の脱け落ちた音楽の全盛のこの世にあって、魂だけを見つめてきたルーの音楽はやはり本当には受け入れられがたいものだろう。それはいいのだ。それでいいのだ。めくらがいる。めくらの音楽で満ちあふれているこの世にあって、ルーは本当に貴重な存在である。そのことを知っている者だけが今は僕の仲間だと思う一日がある。

(「僕はランチにでかける」より)